

「甘口、辛口」（『新潟日報』、2021年6月5日～23日）

田中 史郎

（1）あれもこれも外来野菜

子どもの頃にはなかった野菜が広く出回っている。セロリ、アスパラガス、レタス、カリフラワー、ブロッコリー、パプリカなどを、外国から入ってきた外来野菜だ。外来野菜という場合、狭くは明治以降に移入ないし栽培されたものをさすが、広くは古くからの伝来種も含める。

レタスやセロリは、当初は日本に在住する外国人用として栽培されたとのこと。だがその後、西洋料理の広がりとともに、サラダというそれまで日本にはなかった野菜の生食がこれら野菜の普及に繋がったという。西洋野菜と生食習慣には、関連がある。

ところで、古い外来野菜である、ネギ、ナス、ほうれん草、にんじん、ジャガイモ、トウモロコシ、トマト、ハクサイ、などは漢字表記もあるように、すっかり定着した。

長い時間のなかで人々の交流が多く種類の野菜を日本にもたらしたことを想像すると、これらを食す際の味わいも深まるのではなかろうか。 （2021/6/5）

（2）電気釜が消える？

あえて挑発的にいえば、「今後、電気炊飯器のない家庭が増えるかもしれない...」。かつては白米のご飯は、それだけでご馳走であり、厄介な炊飯という作業を解放したものが電気釜であった。1950年代に登場した電気釜だが、その後「ガス釜」や「ジャー炊飯器」も加わり、それらが各家庭に普及した。

しかし、今後は不透明だ。食の洋風化はもとより、それに加え、ご飯は、家庭で炊くものではなく、コンビニの「パックご飯」をチンすることが常識化するのではないか。欧米でも、家庭でパンを焼くことは無くなりつつあるようだ。もっとも、あちらでは主食という概念がないので、比較できないかもしれないが。

かつて、各家庭にミシンがあり、洋裁なども盛んであったが、最近ではそうではない。洋服は作るものではなく、既製品を選ぶものになった。同様なことが、炊飯器にも起らないとは限らない。 （2021/6/9）

(3) 腸内細菌と食習慣

腸内細菌とは、ヒトや動物の腸内部に常在している細菌のことをさし、それは 1 千種類以上にも及ぶ。その生物にとっての有用性から、善玉菌と悪玉菌に分けることもある。善玉菌は宿主の健康に貢献するもので、ビフィズス菌や乳酸菌などがある。それに対して、悪玉菌は、健康に害を及ぼすものだ。

ところで、海藻を消化する細菌を有しているのは日本人だけだという研究がある。過去において日本人はそうした菌を取り込み、海藻をたくさん食べる食事習慣に繋がっていったと考えられているようだが、あるいは食習慣が数ある細菌のなかから有用なものを常在させたともいえよう。また、パプアニューギニア人は主にサツマイモを食べているにもかかわらず筋肉質であるのは、彼らの腸内に存在する細菌によるものだという。

いずれにしろ、「食」が自然と人間とを繋ぐ要だとしたら、それが悠久の歴史のなかで文化と一体化し生物としてのヒトにも影響を与えているといえよう。

(2021/6/10)

(4) 人口と身長、そして栄養

日本の人口は長いあいだ微増であって、鎌倉時代までは 1 千万人にも達していなかった。その後人口増加がみられ江戸中期には 3 千万人に達したものの、それ以降は停滞。人口が急増するのは明治期になってからで、人口 3 千万人からほぼ一直線に 1 億 3 千万人近くまで増加した。

身長はどうか。成人男女の身長差は 10 センチ程度なので、男子だけの推移をみてもみる。身長は、縄文時代から古墳時代に伸び 163 センチに達したが、その後、江戸期に向かって萎縮し約 155 センチになった。そして明治以降は、人口と同様に、伸長が著しいことはいうまでもない。江戸中期には人口増がみられたものの、身長が低くなったのはなぜか。

江戸期には政治的に太平になるとともに人口は増加したものの、食料の生産は必ずしも追いついていなかったようだ。特に、動物性タンパク質が不足していた。「命の洗濯」という言葉があるが、それは一説では、魚、つまりタンパク質を摂取することを意味するという。

(2021/6/11)

(5) フードデザート (食の砂漠)

フードデザートとは翻訳すれば「食の砂漠」ということになるが、具体的には居住地の周囲に食料品店がなく、生鮮食品などの食料が入手困難な地域のことをさす。

典型的には、大規模小売店（巨大スーパー）の郊外進出と、それによる市街地の小規模店の撤退によって顕在化したといわれる。自動車を持たない人や遠出が難しい高齢者などは、郊外まで食品を買いに行くことが難しい。他にも巨大都市のオフィス街やいわゆる過疎地でも同様のことが生じている。「買い物難民」といういい方もある。

現代人は、徒歩での生活圏のほか、バスや電車、あるいは自家用車といった交通手段を用いた生活圏のなかで生きている。また、それに応じて買い物もする。最寄り品の典型である食料品は、本来、徒歩での生活圏のなかで満たされてきた。だが、人口の過密と過疎は、もっとも基本的な生活の基盤を揺るがしている。地域を考えるにはこの視点が欠かせない。 (2021/6/12)

(6) エネルギーと現代人

「ゾウの時間、ネズミの時間」という議論がある。巨体のゾウは、多くの食料を摂取するが、1分間の心拍数が少なくゆっくりとした時間を費やし、寿命も長い。ネズミは、ゾウとは対照的だが、一生の鼓動回数は約20億回で、ゾウとほぼ同様だという。ゾウとネズミは、時間のリズムが異なるというわけだ。

多くの哺乳類の消費するエネルギーは食料に限られていて、それはサイズ(体重)に応じており、またサイズに応じて一生を完結する。サイズと摂取エネルギー、サイズと寿命はそれぞれ関数関係になっているが、たった一つの例外が現代のヒトである。

現代のヒトは、衣服を纏い住居で暮らす。いわば、エネルギーを衣食住すべてから摂取している。そして、昨今ではゾウと同様のエネルギーを費やすことによって、ゾウと同様の寿命を獲得したという。現代人だけが特権的にエネルギーを利用することが許されるのか、疑問も浮かぶ。 (2021/6/16)

(7) ダイエットとジョギング

昨今では低カロリー食品の人気の高い。また、ジョギングに代表されるように、スポーツの人気の高い。いずれも健康志向だという。

だが、長い人類の歴史は、「食料を如何に確保するか」に迫られるものであった。人口論の通説では、幾何級数的に爆発する人口に、算術級数的にしか増加しない食料の不足が大問題だとされてきた。また、労働は農工業とも重労働であり、スポーツによってカロリーを消費するというような発想もなかったようだ。端的に言って、高いカロリーこそが求められたといえる。

そのようにみた場合、昨今の健康志向は何を意味するか。この事態を「過剰富裕化（かじょうふゆうか）」と名付けた経済学者がいる。むろん、こうした状況は一部の先進国のみのことであり、地球規模では相変わらず飢餓も問題になっている。

ダイエットとジョギングのブームは現代社会の光と陰をうつすものかもしれない。
(2021/6/17)

(8) 食言（しょくげん）

「食」も「言」も分かりきった言葉だが、「食言」となると「どういう意味？」と思う人もいるのではないか。「食言する」といういい回しもある。小生もかつてこの言葉に出会ったとき、咄嗟（とっさ）には理解不能であった。

いうまでもなく、「食」とは口の中に入れることだが、食べてしまえば目の前のものは消えて無くなる。それが食べ物であれば分かりやすいが、「言」となると考える。

この場合、「言」とは自分が発した言葉をさす。そこで「食言」とは「言」を食べてしまうという意味になる。言い換えれば、自らが以前に述べた言葉をなかつたことにすることを意味する。自らの発した前言を翻し約諾（やくだく）を勝手に破棄することをさすのである。『太平記』（二六卷）には、「君子は食言せず。約の堅き事金石の如し。」（『書経』からの引用）とある。

口に入れるものは「食べ物」のみにしたい。肝に銘じて。
(2021/6/18)

(9) 正常財と劣等財

「正常財」や「劣等財」といわれてピンとこない人もいるだろう。これらは経済用語だが、前者を「上級財」、後者を「下級財」ともいう。

素朴に考えると、収入が増加すれば、人はより多くの財（Goods）を購入するであろう。所得が増加すると、需要が増大するような財を正常財（上級財）と呼ぶ。だが、所得が増加すると、需要が減少するような財もある。それら劣等財（下級財）という。

前者は理解しやすいが、後者は説明を要する。例えば、かつて高度経済成長の始めの頃までは主食は「麦ご飯」であった。しかし収入の増加とともに「白米ご飯」が普通になると、麦の需要は低下していった。劣等財とはこうした財をさす。他にも、バターに対するマーガリンなどもそうした例としてあげられる。

劣等財には食料品が多い。それは、食にかんする財の多くが、生活上の必需品である（あった）ことに起因しているのである。
(2021/6/19)

(10) 食指が動く、おいしい話

「食指が動く」とは、中国の故事に由来するもので、食欲が高まるという意味である。そこから転じて、ある物事に対し欲望や興味が生じるという意味が付加されていった。

ところで、文化庁が毎年実施している「国語に関する世論調査」によると、この言葉にかんして誤用が多いという。「食指をそそられる」という使い方をする人も多いとのこと。これは「食欲をそそられる」との混同によるものだ。使用法があまりに一般化すると、もとの由来などは消えてしまうということか。

それはともあれ、他にも「食」に関連して、「おいしい話」や「うまい話」などという表現もある。これらは都合の良い話という意味だが、それらが「食物」や「味」を喩として用いられている。

物事に対する欲求や関心を「食」にかんする言葉を用いて示すということは意味深い。人間の第一義的欲求が「食」にあることを示唆している。 (2021/6/23)